

社会的距離の構造に関する研究

—マイノリティや国家に対する社会的認知の分析を通して—

武藤 麻美

第1章 社会的距離に関する研究の背景

日本の医療社会福祉領域では、高齢者の居宅でのケア推進や、精神障害者地域移行・地域定着支援事業や更生保護制度など、地域での福祉的・医療的ケアに重点を置いた支援が、今後益々活発化すると考えられる（内閣府，2011）。また、グローバル化が進む日本では、労働人口減少問題の解消も含めて、将来、海外からの労働者の流入は増えていくだろう。多文化ないし多様な価値観・背景を持つ人たちが共存する社会へと、変遷していくことが考えられる。

しかし、こうした方向に行政が舵を切っても、実際は社会的マイノリティ（e.g., 黒木，1999；森田・荒牧，2013）に対する、地域住民の心のバリアフリー化（心理的な排除の低減）が追い付いておらず、理解不足から住居の提供や雇用を断るなど、受け入れ体制が不十分である（e.g., Tanaka et al., 2005）。社会的マイノリティに対する心理的な排除の問題を解決していくには、一般の人々がどのような認知を経て心理的な排除を行うのか、またどのような人が心理的な排除を行いやすいのか、解明することが喫緊の課題といえる。

そこで本研究では、集団成員への排除の一つの指標と考えられる社会的距離の延伸（e.g., Bogardus, 1925; Gaebel et al., 2002; 山崎, 2012）に着目し、社会的マイノリティの各カテゴリー（e.g., 障害者）に対する社会的距離が、どのような条件下で伸長するか、そしてどのような人が社会的マイノリティに対する社会的距離を遠ざけやすいのか、明らかにすることを目的とした。そして、問題とする社会的距離については、行動面測定項目（拒否や回避行動の程度とその行動への志向性）や、認知面測定項目（サブタイプ化の程度）、感情面測定の線分（親近感の程度）など、多様な方法を用いて測定し、各方法で得られた値の関連も検討した。これは、これまで社会的距離の測定が、主に行動面測定項目を用いたものに限られており、行動面に表出された現象しか捉えられていないが、認知面や感情面に表出される社会的距離もあると考えられたため、多面的に検討し、社会的距離の様相の解明を試みた。

そして、上記のように社会的距離を三側面から捉えるのは、ある側面は社会的距離がしばしば表出するが、別の側面はそうでもないといったことが起きると考えられるからである。例えば、日ごろ、地域住民がある社会問題（例えば、障害者福祉やエネルギー問題）について理解のある考え方や発言をしても、いざ近隣に関連する施設をつくるとなると、強い反対運動が起こることがある。こうした現象は、NIMBY（Not In My Back Yard）と呼ばれ（e.g., 鈴木, 2015）、障害者の社会復帰や地域生活支援を困難にしている大きな要因でもある。NIMBYのような、認知と行動が一貫しないにも関わらず、認知対象への社会的距離が拡大してしまう問題を解決していくためには、社会的距離を認知・行動・感情の各側面から捉え、各側面の特徴を明らかにする必要があるだろう。

また、社会的距離の対象として、社会的マイノリティとされる精神障害者や、ステップファミリーやひとり親家庭、社会的養護を行う施設での生活、里親委託事業などの、ニュータイプの家族形態とそこで生活する児童、国家を基にした内・外集団（日本・米国・中国）などを設定した。個人（マイクロ）から家族（メゾ）、国家（マクロ）へと（e.g., Martikainen et al., 2002）、社会的距離の評定対象カテゴリーを拡大し、各カテゴリーレベルにおける対象に対する社会的距離を検討した。先行研究では、対象カテゴリーを変化させながら、体系的に社会的距離を検討したものは殆どない。

さらに、心理的な排除を惹起する要因や、その内的プロセスを解明するため、先行研究では殆ど検討されてこなかった、社会的距離を増大ないし短縮する要因と予測される「帰属複雑性」「曖昧さ耐性」「ジェンダー観（性役割態度）」や、集団に関する「期待値と現実値の乖離の効果」や「集団同一視」と、「デモグラフィック要因」（例えば性別や年齢、社会人経験の有無、認知対象との接触経験の有無など）の効果も検討した。

第2章 精神障害者に対する社会的距離に影響を及ぼす不安度要因および理解度要因について ——サブタイプ化を媒介する要因の分析——

第2章では、個人（精神障害者）に対する社会的距離を、サブタイプ化測定項目（認知面測定項目）を用いて検討した。また、サブタイプ化が生起する際の、認知者の内的プロセスと、年齢や性別などのデモグラフィックな要因が、サブタイプ化に及ぼす効果も検討した。

参加者は、15歳から85歳の415名（男性179名、女性236名；学生284名、社会人131名）であり、平均年齢は29.7歳（ $SD = 17.10$ ）であった。参加者には、精神障害者に関するシナリオ（刺激文）を読ませ、ターゲットに対する理解度・サブタイプ化度・不安度を4件法で回答してもらった。その結果、認知者が精神障害者の言動を理解できない場合、認知的統制感を取り戻すために社会的距離を変化させ、相手と心理的に距離を置こうとすることが明らかとなった。そして、この傾向は男女ともに見られ、特に若年になるほど、不安を媒介要因として社会的距離が変化することが示された。若年者にとって、理解できない他者は、すぐに心理的排除の対象になる可能性が示唆された。

第3章 精神障害者に対する社会的距離に影響する要因 ——帰属複雑性と曖昧さ耐性の効果の検討——

第3章では、精神障害者に対する社会的距離について、提示する刺激文の条件を増やし、精神障害者との接触経験や既有知識の量も統制した実験を行った。そして、認知者の曖昧さ耐性や帰属複雑性などの要因が、社会的距離に及ぼす効果についても検討した。また、精神障害者への心理的な排除は、共生や共働の敬遠といった行動的側面にしばしば表れることから、行動面測定項目を設定した。さらに、行動面と認知面、感情面（親近感の低下）との関連を明らかにし、社会的距離の構造を検討した。

実験デザインは、2（ターゲット：精神障害者像提示条件・非提示条件）× 2（帰属複雑性：高群・低群）× 2（曖昧さ耐性：高群・低群）の参加者内・参加者間混合計画とし、185名（年齢： $M = 26.80$, $SD = 14.66$ ；性別：男性26名、女性159名）を対象とした。その結果、帰属複雑性が低い人は、どのような人物に対しても理解度が低く、全般的に他者を否定的に認知しやすいことが明らかとなった。また、曖昧さ耐性が高いほど、精神障害者に対する社会的距離が近くなることも示された。曖昧さ耐性の高低によって、行動の原因推測が困難な対象を、受容しようという意欲が影響される可能性が示された。さらに、社会的距離を遠ざけるための認知的方略であるサブタイプ化と、拒否的行動、情緒的方略である親近感を弱めることなどが互いに関連し、特に認知面と感情面が行動面を予測することが明らかとなった。これより、対象と認知的に距離を置こうとすると親近感も薄れ、否定的態度も強くなり、物理的に距離を置こうとすることが推察される。

第4章 家族形態と児童に対する社会的距離に関する研究 ——性役割態度と帰属複雑性の効果の検討——

第4章では、児童と家族に対する社会的距離を検討した。昨今増加傾向にあるステップファミリーやひ

とり親家庭, 社会的養護を行う施設での生活, 里親委託事業などの形態に対する心理的受容の程度を, 非受容的な行動に関する測定項目や, サブタイプ化測定項目を用いて検討し, 帰属複雑性や性役割態度の影響についても確認した。

実験デザインは, 5 (児童の家族形態: 両親と暮らす条件・里親と暮らす条件・児童養護施設で暮らす条件・ひとり親と暮らす条件・ステップファミリーと暮らす条件) × 2 (帰属複雑性: 高群・低群) × 2 (性役割態度: 伝統主義的・平等主義的) の参加者間計画とした。男女大学生 298 名を対象とし, 年齢の平均値は 19.30 ($SD = 3.04$) であった。その結果, 帰属複雑性が高くなるほど, 性役割態度も平等主義的となることが確認された。そして, 平等主義的性役割態度が強く, 帰属複雑性が低い人では, 里親やひとり親, ステップファミリーと暮らす児童に対して社会的距離が近かったが, 児童養護施設利用児童に対しては社会的距離が遠かった。平等主義的性役割態度であっても, 帰属複雑性が低いと, 児童養護施設のような, 親の機能を果たす人が少ない家族形態を受容できない, または児童養護施設を家庭として見なしていない可能性が示唆された。また, 伝統主義的性役割態度を持ち, 帰属複雑性が低い人は, ひとり親家庭への社会的距離が遠かった。これは, 両親と実子から成る家族プロトタイプを重視する, 伝統主義的性役割態度の効果の大きさがうかがえるうえ, 帰属複雑性の低さから, 児童の家庭背景を考慮することが乏しく, 児童やその家庭を否定的に認知したと考えられよう。

第5章 空間的距離の認知が社会的距離に及ぼす影響

——原発問題をテーマとし外集団間の差異に焦点を当てて——

第 5 章では, 対象カテゴリーの範囲を国家へと拡大し, 日本や諸外国を内・外集団として設定した。認知者が個人や家族に向ける社会的距離のみならず, 国家という広範なカテゴリーに向ける社会的距離と, そこに空間的距離の遠近に関する認知がどのように影響するかも検討した。社会的距離は行動的側面に着目した。

実験デザインは, 3 (内集団・外集団ポジティブ・外集団ネガティブ) × 2 (実験操作: 空間的距離操作条件・統制条件) の参加者間計画とした。95 名を対象とし, 平均年齢は 19.39 歳 ($SD = 1.88$) であった。その結果, 内集団 (日本) については, 既存の印象 (ポジティブ感情) とその強さが強固であるため, 空間的距離が遠いという刺激情報を受けても, 内集団への評価は変動しにくく, 社会的距離は遠くならなかった。一方, 既存の印象がポジティブな外集団 (米国) とネガティブな外集団 (中国) では, 前者で空間的距離の長短の認知が社会的距離評定値に影響しやすいことが確認された。集団に関する既存の好意度とその強度が, 物理的・心理的刺激のインパクトに対する緩衝効果を持つことが示された。米国のような, 既存の印象がポジティブで, その強度が弱い国については, 少しのプロパガンダにより, 世論が大きく変動しかねない可能性が示唆されたといえる。

第6章 内・外集団における異なる価値観の保持者に対する社会的距離

——戦争の是非をテーマとして——

第 6 章も, 国家を対象カテゴリーとし, 社会的距離の感情的側面である親近感を測定した。そして, 内・外集団成員 (日本人・米国人) に対する社会的距離 (親近感) と好意度の関係や, これらの変数に影響する要因についても検討した。

実験デザインは, 2 (意見一致条件: 戦争反対意見・意見不一致条件: 戦争賛成意見) × 2 (内集団: 日本人・外集団: 米国人) の参加者間計画とし, 2 つの実験を実施し検証した。実験 1 では, 46 名を対象とし, 平均年齢は 18.80 歳 ($SD = 1.17$) であった。実験 2 では, 78 名を対象にし, 平均年齢は 19.19 歳

($SD = 1.85$) であった。その結果、社会的距離の感情的側面は、対象の期待値と現実値との乖離の効果によって変動し、嫌悪感と連動することが明らかとなった。さらに、非受容的行動への志向性と、親近感を弱めることとの関連も確認されたことから、親近感が薄れると嫌悪感も増大し、物理的にも距離を遠ざけようとする、負の連鎖の存在がうかがえる。このことは、例えば外国人や、異なる思想・文化・宗教・生活背景を持つ人に対するヘイトスピーチ（言葉による排斥）や、社会やコミュニティから追放しようとする行動が、激しい嫌悪の感情を伴い、相手を人間扱いしようとしなない残酷な態度にも繋がりがねないことを示唆する。

第7章 総合考察

以上より、次のことが考えられる。すなわち、対象を理解できない場合、社会的距離は遠くなる。このとき、不安を媒介要因として社会的距離は変動している。また、帰属複雑性の低さや曖昧さ耐性の低さ、伝統主義的性役割態度は社会的距離の延伸に繋がる。なお、これらはマイクロ・メゾの社会的カテゴリー、具体的には社会的マイノリティを対象にした場合に該当する。マクロレベルのカテゴリーである国家を対象とした場合は、既存の印象の正負やその強度が、社会的距離の変動を左右する要因となる。そして、対象に関する期待値と現実値のギャップの効果は、社会的距離を変化させ、良い意味で期待を裏切られたというギャップならば社会的距離は近くなり、悪い意味で期待を裏切られたというギャップならば社会的距離は遠くなる。なお、いずれのレベルでも、社会的距離を遠ざけるという態度は、行動的側面に顕著に表出される。そして、その背後では、認知的側面と感情的側面が、行動的側面に影響を及ぼし、促進しているのである。さらに、上記の得られた知見をモデル図化したものが Figure 1 である。

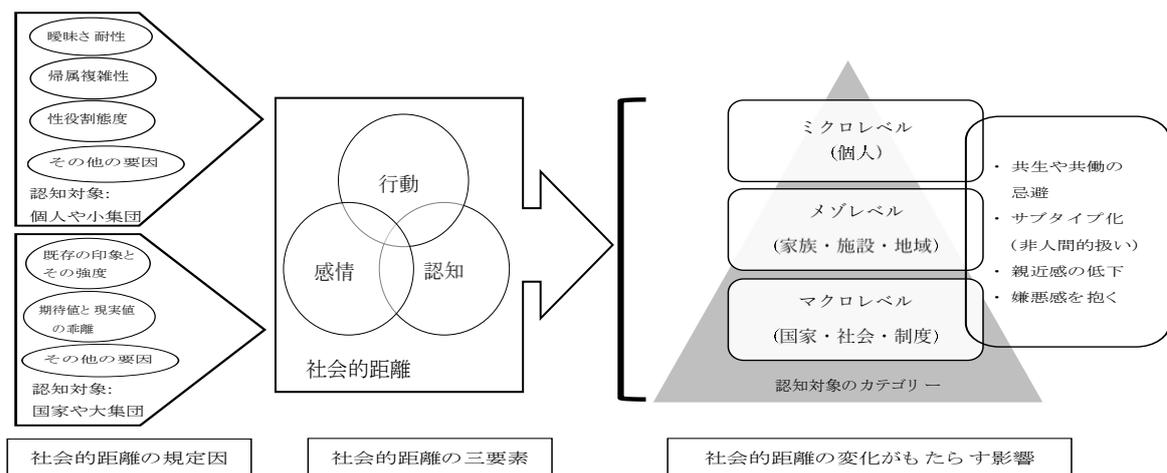


Figure 1 ミクロ・メゾ・マクロレベルの認知対象に対する社会的距離に関するモデル図

本研究の知見は、種々の社会問題にも適用して考えることが可能だろう。例えば精神科臨床では、精神障害者との接触経験を増すことで社会的距離が近くなるという報告もあるが (e.g., 伊東ら, 2005), 精神障害者に身近に関わる医療従事者ほど、差別や偏見を持ち、非人間的な扱いを行っているという報告もある (e.g., 藤野, 2003)。これは一見矛盾した報告ではある。しかし、本研究のマイクロレベルの対象に関する社会的距離の知見を参考にするならば、たとえ臨床経験を重ね、接触経験を増したとしても、曖昧さ耐性や帰属複雑性が低い人においては、精神障害者に対する社会的距離はポジティブな方向に変化しにくいといえよう。むしろ、こうした人たちには、自身のパーソナリティ傾向についての把握を促し、変化に努めてもらうといった心理教育の実践が求められる。(社会心理学)